

家庭ノ主婦、飲食物取扱業者、看護婦等ヲ對象トスル講習會ハ一應普及シタルモ前回開催ノ際參加者ノ勧誘不徹底ナリシモノアルヲ以テ此ノ方面ヲ選ビテ四十二回開催セリ。
又普通防疫講演會ハ年中四百九十二回、活動寫眞應用講演會ハ二百二十回ノ開催ヲ見タリ。
此等各種目ヲ合計スレバ本年當部ヨリ職員ヲ派遣シテ開催シタルモノ、ミニテ左表ノ如ク、千百八十七回ニ亘リ實ニ七十六萬一千餘人ノ大衆ニ對シテ呼號宣傳ヲ行ヒタル次第ナリ。

●防疫講習會、協議會、講演會、展覽會、施行回数及參會人員表

區分	昭和四年		昭和五年		昭和六年		昭和七年		昭和八年	
	回数	人員	回数	人員	回数	人員	回数	人員	回数	人員
講習會	四	五〇	二七	三、二六	六	一四、二八	三六	七、七四	四三	六、三六
協議會	三	八九	九	二、四四	八	二六八	八	三、〇四	一〇	三、九九
講演會	四二	七、六〇	一、〇七	一、一四、九七	五七	一、〇〇、三三	四六	八六、九四	四九	一〇五、四三
活動寫眞應用講演會	三九	三六、七三	三二	四、七三	三八	三三、二六	五二	一一九、六三	三〇	一八七、三六
活動寫眞映寫會	二五	二九、四六	三六	九七、二八	四五	一、〇九、四三	四七	五三、一六	三〇	三〇、六四
童話會	二	二四、八四	一〇〇	七、二二	一〇	七、四〇	三九	三〇、二六	三	三、九四
展覽會	一〇九	四四、〇七	一〇六	四八、二六	四	一〇六、五二	二六	七、九二	四	九三、九〇
計	一、一五九	一、一四、三〇	二、〇九六	二、九四、三三	一、四六〇	一、六三、四八	一、一四一	八四、八五	一、一八七	七六、二九

備考 一、本表ハ防疫課ヨリ職員ヲ派遣シタルモノノミヲ掲上ス

二、本年中「母の會」ト稱シテ疫病豫防並「デフテリア」ノ豫防ヲ目的トシテ開催シタルモノ二百十回アリ

三、本表外防疫課ヨリ講師及活動寫眞班ノ派遣ヲ請ハスシテ警察署區町村等ノ主催ニテ防疫宣傳會ヲ開催シタルモノ本年中ニ二百五十三回聽講人員三十二萬五千三百餘人アリ

四、本表ニハ呼吸器系傳染病豫防ヲ目的トシテ開催シタルモノ若干ヲ含ム

二、檢病的調査

患者ノ早期發見、無届者摘發ノ爲ニ警察署ニ於テ夫々情況ニ應ジ檢病的戸口調査ヲ施行セリ、右ニ依リ警察官吏ガ傳染病ノ疑ヲ懷キ報告ヲ爲セル注意患者數ハ四千七十二名（呼吸器系傳染病疑モ含ム）ニ達シ之ヲ防疫醫警察醫ニ於テ檢診ノ上傳染病ト決定シタルモノハ赤痢二百五十八名、腸「チフス」及「バラチフス」九十二名ニ及ベリ、蓋シ今猶巷間ニ傳染病ノ届出ヲ怠レル事實ノ陰翳タルヲ免レズ。

（檢病的調査ニ依リ發見シタル呼吸器傳染病ハ猩紅熱三五、「デフテリア」二九、痘瘡二八、計九二名アリ右ハ第八節及第九節ノ記録ニハ之ヲ省略ス）

是等傳染病ヲ發見シタル警察官吏ニ對シテハ獎勵上警察賞與規則ニ據リテ賞與ヲ爲セリ、其ノ賞金授與件數（呼吸器系傳染病發見ノモノヲ含ム）左ノ如シ。

昭和四年 四百十七件
同 五年 四百五件

同 六 年
同 七 年
同 八 年

三百十二件
二百二十二件
百八十五件

(賞罰ニ止メタルモノ二百四十五件)

三、死體檢案

前項ノ檢病的戸口調査ハ常時ニ於テハ、傳染病ノ届出ヲ徒ニ往苒スルモノ或ハ隱蔽治療ヲ行ヘルモノヲ時ニ摘發シテ以テ一般ノ届出ヲ刺戟促進スルヲ目的トセリ、然ルニ猶且誤認或ハ隱蔽ノ儘終結スルモノ尠ナシトセザルヲ以テ、當廳ニ於テハ一般死亡者ニ對シ埋火葬認可證下付ノ際死體ノ所在病名其ノ他ヲ區町村ヨリ警察署ニ通報セシメ、警察署ハ狀況ヲ考察シ必要ト認メタル場合ニハ直ニ防疫醫警察醫ヲ現場ニ派シテ死體檢案ヲ施行シ検査材料ヲ採取シテ細菌検査ヲ行ヒ居レリ、本年ニ於ケル其ノ成績ハ左表ノ如クナルガ年々多數ノ赤痢死者ヲ發見シツ、アルコトハ特ニ注目セラル、所ナリ。

●死體檢案成績表

年 次	死亡總數	死體檢案施行數	傳染病發見數			
			赤痢	腸チフス 「パラチフス」	其 他	計
昭和四年	八五、〇二三	九、六四〇	一六三	四	三	一七〇
同 五 年	七三、九九五	六、七〇〇	一六一	五	一〇	一七六

同 六 年	八二、八五三	六、六二〇	一三一	四	一二	一四七
同 七 年	七五、八四八	五、五九三	一三二	二	一六	一五〇
同 八 年	八三、一五五	五、五七〇	九八	二	二七	一二七

備考 死亡總數中ニハ既ニ傳染病ト決定シタルモノ並島嶼ニ於ケル死亡數ヲ含マス

四、膽汁培養基ノ利用

大正十四年膽汁培養基ヲ「アンプール」入ニ改メ、警察署備付ノミニ止メズ弘ク内科小兒科等ノ開業醫家ニ之ヲ配付シ、細菌検査所ニ係員ヲ置キテ醫師ノ要求ニ應ジテ集配ヲ爲ス等極力其ノ利用獎勵ニ努メタル結果、當廳製ノ培養基ノミナラズ諸病院及他ノ検査所等ニモ亦之ニ倣フノ風起リ、注意患者ヨリ採血シテ之ヲ膽汁培養ニ附シ以テ診斷ヲ確定シタルモノ實ニ發生總患者ノ四割以上ニ及ブ狀勢ヲ呈スルニ至レリ。

左表ハ當廳細菌検査所ニ於テ検査ヲ行ヒタルモノト、他ノ検査所及病院ニ於テ當廳配付ノ「アンプール」入培養基ヲ利用シタル結果ヲ報告シ來レルモノトノ合算成績ニシテ、該表以外ニ猶當廳製造ノ培養基及病院其ノ他ノ自主的ニ作ラレタル培養基モ相當多數利用セラレツ、アリ。

●膽汁培養基利用成績表

年次	區分	腸「チフス」及「バ ラチフス」患者總數	膽汁培養基ヲ供 給シタル數	利用セラレタル數	陽性數	利用陽性數對 百分比
昭和四年	同	四、三〇八	四、九七五	三、八九一	一、〇四三	二六・八一
同五年	同	四、三〇四	五、四五九	三、八八六	一、一三〇	二九・〇八
同六年	同	四、七七五	六、六三五	四、八四五	一、二九一	二六・六四
同七年	同	三、七九九	五、一九六	四、〇〇一	一、〇三一	二五・七七
同八年	同	三、七七二	五、〇〇五	四、一九八	一、〇五六	二五・一五

備考 一、本表ニハ島嶼及水上ニ於ケル患者數ヲ含マズ

二、本表ノ數ハ當廳ニ於テ製造配付シタル培養基ノミニ付テ調査シタルニ依リ腸「チフス」統計第八表ト符合セズ

五、野菜ノ取扱改善

都市ニ排泄セラル、糞尿ガ農村ニ運バレテ肥料ニ用ヒラレ、農村ニ生産シタル野菜ハ都市ニ搬出セラレテ市民ノ食膳ニ供セラル、消化器系傳染病及寄生蟲ノ病原體ハ常ニ此ノ需給過程ニ伴ツテ循環的ニ流行ノ因果ヲ爲シツ、アルコトハ疑フニ由ナシ、然レドモ累世ノ慣習ハ民衆ノ注意力ヲ麻痺セシメテ、極メテ露骨ニ野菜類ガ糞尿桶ト同一ノ用水ニテ洗ハレ、或ハ糞尿桶ト野菜トヲ混載シテ市場ニ運バルル舟車ト途上ニ邂逅スルモ何等之ヲ怪シマザルノ風アリ。蓋シ吾國ノ防疫事績ノ揚ラザル所以爰ニアルベシ。

當廳ニ於テハ曾テ大正十四、五年ノ頃管下ノ野菜生産農家ニ對シ一齊ニ野菜洗場ヲ築造セシメタルガ、其ノ後郊外ノ發展急速ニシテ農耕地モ住宅地ニ變ハリ洗場ノ用途ヲ廢シタルモノ少カラザルモ、依然タル農耕地ニ對シテハ洗場ノ活用ヲ勸說シ、不潔ナル水ヲ用ヒテ洗滌スルコトナキヤウ注意シ居レリ。

六、牡蠣ノ取扱改善

(イ) 管下ノ生産品ニ對スル施設

食用牡蠣ノ取扱方法改善ニ關シテハ年來腐心シツ、アル處ナルモ、管下ノ生産業界ハ都市ノ膨脹ニ抑壓サレテ年々萎縮ノ狀態ニアル爲ニ、根本的改善施設ノ實施ハ相當困難ナル事情アリ、然レドモ防疫上ノ見地ニ於テハ之ヲ放任スベキニアラザルヲ以テ夫々機宜ノ方法ヲ講ジ居レリ。本年モ芝浦漁業組合ニ於ケル牡蠣剝身作業ガ極メテ不良ナルニ稽ミ其ノ業者二十三戸中ノ十三戸ニハ各戸ニ設備ヲ改造セシメ、比較的小營業者タル他ノ十戸ニ對シテハ共同作業場ヲ新ニ建設セシメテ之ニ集合作業ヲ營マシムルコト、爲セリ。

又深川鹽崎町、芝浦、大森等牡蠣業者ノ集團地ニ對シテハ是等取扱方法ノ改善ト相俟テ特ニ腸「チフス」豫防注射勵行ニ努メ居レリ。

(ロ) 管外ヨリノ移入品ニ就テ

昨七年ノ秋恰モ牡蠣ノ出盛期ニ際シテ、管内移入品ノ大部ヲ占ムル宮城縣ノ生産地方面ニ腸「チフス」ノ密集の流行アリ事態洵ニ憂慮スベキモノアリシヲ以テ管下移入業者ニ戒告シテ、約二週間右方面産ノ剝身蠣ノ入荷ヲ抑止セシメ生産地ニ施設ノ改善ヲ促シタリ。

右ノ措置ハ産地業者並縣當局者ヲ覺醒セシムルニ充分ナル機轉トナリタルモノ、如ク、後述ノ善後施設ヲ講ズルト共ニ同縣ニ於テハ、本年三月三十一日縣令第一七號ヲ以テ「牡蠣營業取締規則」ヲ制定公布セリ、其ノ規程ノ内容ヲ要約スレバ先ヅ業者ヲ許可營業ト爲シ、剝身作業場、牡蠣貯藏場、厠等ニ構造制限ヲ附シ、工作物ニハ竣工検査ヲ行ヒ又従業員ニ一定ノ衛生的遵守事項ヲ規定シ罰則ヲ附セルモノナリ。

而シテ現地施設トシテハ農林省及縣ノ補助ノ下ニ、水産組合ノ事業トシテ縣下生産地三十八ヶ所ニ共同牡蠣處理場ヲ築造シツ、アリシガ漸ク竣成ヲ告ゲ十一月十日松島公園ニ於テ縣知事臨場シテ之ガ落成式ヲ舉行セリ。當日ハ警視廳ヨリモ關係職員ヲ臨席セシメラレタキ旨縣ヨリ希望アリシヲ以テ防疫課長ヲ派シ内務、農林兩省ノ主務技術官ト共ニ狀況視察ヲ行ヒタルガ、同縣ノ改良施設ハ適切ニシテ其ノ共同處理場ノ如キハ規模結構ニシテ永久性ヲ有シ防疫上及作業能率共ニ恐ラク世界ニ範タルベシトノ賞讃ヲ博シ、生産業者亦頗ル歡喜ノ意ヲ表セリト謂フ。

右宮城縣ニ於ケル牡蠣業界ノ革新ハ隣域岩手縣ヲモ刺戟スルニ至リ、岩手縣ニ於テモ九月十三日

縣令第一六號ヲ以テ既制ノ「魚類販賣取締規則」ヲ改正シテ牡蠣ノ採取又ハ作業場、貯藏場、厠間等ノ構造設備ニ制限ヲ加ヘ、別ニ便所、飲用水改善費ヲ補助シ、豫防「ワクチン」ノ應用及檢便ヲ施行セル旨ノ通報アリタリ。

次デ管内移入ノ第三位ヲ占ムル靜岡縣ノ清水灣並濱名湖ノ産地ノ狀況ヲ知悉スル必要ヲ認め、十月ノ候職員ヲ派シテ之ヲ實査セシメタルガ、同縣ニ於テモ宮城縣ノ施設改良狀況ヲ見學シ適宜ノ改良ヲ加フベク銳意考究ヲ重ネツ、アル旨復命セリ。

(ハ) 牡蠣ノ細菌検査

近年主要養蠣地ハ孰レモ懸垂式養殖ヲ行ヘルガ、小産地ニ於テハ依然地播式ニ依レリ、若シ牡蠣ガ養殖場ニ於テ汚染サル、コトアリトセバ地播式ニノミ其ノ實現性ヲ許スナランモ、特ニ水深淺キ入江等ニアラザル限リ恐ラク養殖場ニ於テ汚染サル、憂ナカルベシ、然レドモ遠淺或ハ沖合ニ在ル大規模ノ養殖場ノ如キハ陸岸ニ貯蠣所ノ必要アリ而シテ多クノ養蠣地ニ於テハ殆ド其ノ設備ヲ完備スルコトナク、養殖場ヨリ採取シ來レル貝蠣ハ便宜、渚岸、河床、下水溝等ニ貯留スル弊習アル爲ニ此所ニ於テ下水ヲ吸收シテ汚染スルニ至ルナリ、尙剝身及其ノ後ノ取扱操作ノ際人ノ手指或ハ使用水等ニ依リ汚染サル、機會亦ナシトセズ。

産地及販賣徑路ニ依リテ何處ノ牡蠣ハ如何ナル清淨程度ヲ保持セルヤヲ常ニ察知スルコトヲ得

バ、時間的ニ於テ縱令其ノ同一品ガ市井ニ消化後ニ検査結果ヲ判定シ得ルモノト雖防疫上多大ノ曙光ヲ認メ、延テ産地及中間取扱業者ニ戒心ヲ與フル效果アルヲ以テ、昨年來牡蠣ノ細菌検査方法ニ就キ實驗研究ヲ重ネツ、アリシガ、本年夏漸ク其ノ検査方式（乳糖ヲ分解シテ發生スル「ガス」ノ示數、遠藤培養基上ニ發育スル菌ノ聚落概算及普通寒天混合平板培養ニヨル菌數計算等ヲ綜合シテ品質ノ良否ヲ判定ス）ヲ確立シ得タルニ依リ十月ヨリ防疫醫一名助手二名ヲ配シテ検査係ト爲シ一般市販ノ貝蠣及剝身蠣ヲ蒐集シテ細菌検査ヲ施行シ居レリ。

七、菓子ノ取扱改善

赤痢豫防上ノ見地ヨリ従前ノ通菓子製造業者ニ對シテ保菌者檢索ヲ施行シ又、菓子製造業者ノ作業場ニ於ケル手洗裝置及便所其ノ他ノ改善、製造並販賣従業員ノ手洗ノ習慣、小賣ノ場合直接手指ヲ以テ扱ハザルコト等ニ關シ講演其ノ他ノ機會ヲ利用シテ或ハ業者ノ覺醒ヲ勸説シ或ハ消費者ノ注意ヲ喚起セシメテ營業者ヲ刺戟シ、又鑑別力ニ乏シキ小兒ノ買喰ニ就テノ危險ヲ保護者ニ説示スル等各種ノ方法ヲ講ジツ、アリ。

八、井戸ノ構造改善

腸「チフス」豫防上ノ施設トシテ、昭和元年ヨリ同三年ノ間特ニ事務係員ヲ置キテ先ヅ急施ノ必要ヲ認メタル料理屋、飲食店、豆腐商、魚介商等公衆ニ直接關係ヲ有スル業者並傳染病多發地域等ニ於

ケル在來開放井戸ヲ、地盤面下深サ三米以上ヲ土壤ニテ埋ムルコトヲ要義トスル閉鎖式ニ改造セシメタリ。爾來新鑿スルモノハ原則トシテ閉鎖式ニ構造スルヤウ規定シ、爾他ノ未改良ノ開放井戸ハ附近ニ、傳染病發生其ノ他適宜ノ機會アル毎ニ之ヲ閉鎖式ニ改造スルヤウ勸奨シ居レリ、然ルニ都市居住者ノ常トシテ屢々生業ヲ變ヘルモノアリ、急發展地ニハ設備ヲ省ミズ簡易ナル飲食店ヲ設クルモノアリテ既述ノ如ク本年モ井戸水ヲ介シ蕎麥屋ヨリ腸「チフス」病毒ヲ傳播シタル事例ヲ出セリ、所定ノ「閉鎖式井戸」ノ構造要件ヲ無視シ單ニ地表ノミヲ蔽ヒテ、外見ヲ糊塗セル爲ニ却テ下水ノ混入スルヲ氣付カズ不測ノ災厄ヲ招クモノアル如キハ、畢竟民衆ノ飲料水ニ對スル關心ヲ缺如セラルニ由ル處ニシテ豫テ衛生思想ノ普及ニハ多年黽勉是レ努メツ、アルニ拘ラズ、都會人ノ大多數ガ借家住ニシテ定住性乏シク且井戸所有者ト使用者トヲ異ニセル爲ニ改良趣旨ノ徹底困難ナルハ遺憾トスル所ナリ。

本年ノ井戸改良成績左ノ如シ。

●井戸改良成績表

年	次	改 良 個 數	改 良 費
自 昭和 四年 年		四四、六五三	三、一二四、九五八 ^円

計	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年
	三、九九三	八八四	八〇四	一、五三八
二五四、四三四	四四、三九五	三〇、四四三	四七、二三一	三、五〇一、四六一

本表ノ外改良獎勵開始以前ニ在リシ閉鎖井戸約二萬七千個アリタリ

九、上水道ニ對スル措置

水道或ハ簡易水道ニ病毒混入シ、腸「チフス」「バラチフス」ヲ爆發セシメ悲慘ナル事態ヲ惹起シタル報告年々跡ヲ絶タザルヲ以テ、水源地方ノ消化器系傳染病就中腸「チフス」、「バラチフス」ノ消長、町村落下水ノ末流處理ニ關シ特段ノ注意ヲ拂フト共ニ公私水道ノ管理者ニ警告シテ夏季ノ斷水ノ場合ヲ特ニ注意セシメ、一般民衆ニ對シテモ講演會等ノ際水ノ使用ニ關シ注意教養ヲ行ヒツ、アリ。本年モ現實事件トシテ六、七月ノ候玉川水道（私設會社ノ經營ニシテ蒲田、大森、品川及荏原ノ各區九萬六千戸ニ給水シ居レリ）ノ水道水ニ異狀ヲ生ジ、使用者ヨリ鹽分含有或ハ混濁等ヲ訴フル批難ノ聲蜂起シタル事件アリ、乃チ本年ハ梅雨期ニ降雨量少ク六、七月頃旱天續キテ河川涸渴セリ而シテ玉川水道ハ多摩川ノ下流ニ取水口ヲ有スル爲滿潮時ニハ其ノ地點迄海水逆流スルヲ以テ水道源

水ニ鹹水ヲ吸入シタルニ事端ヲ發セルモノナリ。仍テ監督廳タル東京府其ノ他ノ關係者ト共ニ屢々現狀調査ヲ行ヒ、對策トシテ一時東京市營水道ヨリ代給水ヲ爲シ、玉川水道ニハ取水場ニ角落シノ築造、滿潮時ニ於ケル取水停止ヲ命ジ、一方水質ノ化學的及細菌學的検査ヲ反復施行シ以テ善後措置ニ努メタリ。

舊東京市水道、荒玉水道、澁谷水道、玉川水道等ハ孰レモ多摩川ニ源水ヲ仰ゲリ、然ルニ同川ノ上流奥多摩ノ勝景地ハ近年頓ニ殷賑シ夏秋ニハ夥シキ登山及探勝客ヲ誘致スルニ至レルニ鑑ミ、「キャンプ」場ノ汚物處理、飲食物營業従事者ノ保菌者檢索或ハ飲用水ノ改良豫防注射ノ勵行等、諸施設ヲ行ヒ以テ水源地方ノ清淨保持ニ努メタリ。

十、蠅ノ驅除

赤痢其ノ他ノ傳染病豫防上驅蠅ノ緊要ナルコトニ就テハ、先年來屢々印刷物、講演等ヲ以テ民衆ニ宣傳シ、一方市町村、町會等ヲ督勵シテ之ガ實際運動ヲ行ヒ來リシガ本年モ前例ニ倣ヒテ、市區町村及町會自ラ各戸ニ驅蠅劑撒布ヲ行ヒテ民家ニ範ヲ示シタルモノ多シ。又七月二十日ヲ期シ管下一齊『蠅捕デー』ヲ催シ以テ府民ノ防疫思想喚起ニ努メタルガ、熱心ナル町會ニアリテハ毎週驅蠅劑撒布ヲ行ヒ或ハ屢々蠅捕デーヲ行フ等、自治豫防ノ實ヲ舉ゲツ、アルモノ尠カラズ。

本年此等市區町村其ノ他ノ團體ニ於テ使用シタル驅蠅劑及各種消毒劑ノ消費量ハ十八町入二萬四千

十五罐ニ及ベリ、又蠅捕デーニ於ケル捕蠅數左ノ如シ。

●蠅捕デーニ於ケル捕蠅數 (臨時蠅捕デーノモノヲ合算ス)

年	次	捕 蠅 數	摘	要
昭 和	四 年	一〇一、三三二、八六二	千五百四十一合トシテ換算セハ	六十七石五斗五升五合
同	五 年	一二〇、五八四、九四七	同	八十石三斗九升
同	六 年	一一〇、一三六、三二九	同	七十三石四斗二升四合
同	七 年	一二〇、九六二、三三九	同	八十石六斗四升二合
同	八 年	一四七、四七〇、〇二五	同	九十八石三斗一升三合

十一、庖 厨 改 善

昭和四年以來講演會或ハ印刷物等ニ依リテ料理屋、飲食店ニ庖厨場ノ改善ヲ勸説シ來リシガ、手洗防蠅、野菜洗滌等ノ設備、殘渣及魚腸骨ノ處理等漸次改良セラレ、飲食物ヲ販賣スル露店業者ニ對シテモ設備及取扱方法ノ改善ヲ促シ又一方ニハ從業員ニ對スル保菌者檢索ノ勵行ニ努メタリ。尙汚物掃除法施行細則第六條ニ依ル雜芥ト別ニ厨芥容器ヲ設備スル指定區域ハ舊東京市域ノ殆ト全部ニ及ビ相當良好ノ成績ヲ收メツ、アリ。

十二、便所及下水道ノ改善

舊東京市域ノ下水道改良事業ハ老ナナル計畫ナルヲ以テ工程遅々タリト雖逐次進捗シ居レリ、然レドモ折角幹線ノ竣成シタル地域ニアリテモ之ヲ建築物ニ連結スル私設下水及放流便所ノ施工ハ個人ノ負擔ニ屬スルヲ以テ財界不振ノ影響ヲ受ケ其ノ普及甚ダ振ハサルニ鑑ミ東京市下水課ト協議シ屢々講演會、座談會ヲ開催シ地主、家主ヲ招集シテ極力之ガ普及方ヲ勸説シ居レリ、年中ニ水洗便所ヲ施工シタルモノ三千百四十一戸ニシテ年末現在數約一萬八千六百戸ヲ算セリ、尙下水工事施設濟家屋ハ年末現在ニ於テ約九萬一千戸ニ上レリ。

新東京市域及郡部町村等ニ對シテハ下水道ノ應急改良ヲ勸奨シツ、アリ、又多槽式汲取便所ノ設置ニ就テモ相當勸奨ニ努メ居レルニ拘ラズ普及遅々タルハ遺憾トスル所ナリ。

十三、保 菌 者 檢 索

當廳ニ於テハ腸「チフス」及赤痢豫防上夙ニ保菌者檢索ノ須要ナルコトヲ認メ、大正十四年以來毎年豫算ヲ計上シテ料理屋、飲食店、旅館、菓子製造業、魚介商及豆腐煮染商等ノ特種營業ノ從業者及家族竝本病ヲ經過全治シタル者其ノ他ノ檢便ヲ施行シ左表ノ如ク年々多數ノ保菌者ヲ發見シ居レリ、併シ管下ニ於ケル此等特種業者ハ二十萬人ノ多數ニ及ベル爲ニ常ニ經費ト作業能力トニ制肘セラレテ必要回数ヲ反復施行スルコト困難ナル事情アルヲ以テ、特ニ丸ノ内、銀座、神田、新宿等ノ如キ股賑ナル飲食店組合竝百貨店ノ食堂從業員ニ就テハ自主的方法ヲ採ラシメテ組合等ヨリ東京市

●
(甲)
「腸」
「チ」
「フ」
「ス」
「病」
「原」
「體」
「保」
「有」
「者」
「檢」
「索」
「成」
「績」
「表」

合 計	其 他	退 院 者							
		計	昭和八年				計		
			第一回	第二回	第三回	第四回		第五回	
患者恢復期ニ際シ検査ヲ依頼シ來レルモノ 刑務所ノ依頼ニ依リ検査シタルモノ 百貨店ノ食堂従業員 料理飲食店組合ニ料金ヲ負擔セシメ テ検査シタルモノ 他ノ検査所(病院)ニ於テ發見シタルモノ 當廳管外ヨリ轉入シタルモノ	一一、七四六	七、一一五	五、三一九	一、七四〇 一、四三三 一、〇四一 六六八 四三七	二二 七 六 六 一	一、七九六	七	五	一二平均 六・六八平均 五・七一
三〇九 八、二三二 二四、〇七七 六、四六一 不詳	九五	四二	三五	二 四 二 一	二 七 六 一 一	二	三	三	九・七一 〇・二四 〇・〇四 〇・一五 〇・三一
二二一、一六六	三	六四平均	五二平均	一五五	二八 一三 五 一	二	一七四	〇・七九	二二 〇・二一
〇・七九	〇・二六	九・〇〇平均	九・七八平均	二・二九	一六・〇九 九・〇七 四・八〇 七・四九 二・二九	〇・九〇	八・五一	〇・二一	二二 八・五一

備考

一、イノ内三越呉服店ニ屬スルモノハ同店ニ於テ毎月一回、其ノ他ノ百貨店及
査シタルモノナリ
ハ全部東京市衛生試験所ニ於テ檢

二、特種營業者トハ旅館、料理屋、飲食店、菓子製造業、魚介商及煮メ商等ヲ云フ

一四四

●(乙) 赤痢病原體保有者檢索成績表

檢 索 範 圍 別	檢 査 數	保菌者發見數	發見千分率	前年同 期發見 千分率
特種營業者 〔防疫班施行 各署施行〕	一〇二、七二六 一六、九〇二	一八三 二八	一・七八 一・六六	一・三七 一・六二
露店飲食物販賣者	三一、六六五	五四	一・七一	一・〇二
學校、會社、工場等食堂従業員	一六、二六二	二六	一・六〇	一・三四
宮内省食料品納入者	一五、六一四	二二	一・四一	〇・八七
患者家族及同居人	五〇、三〇三	二九五	五・八六	五・二四
保菌者家族及同居人	一、三五五	三	二・二一	四・六五
其他	一二、〇四四	九	〇・七五	一・五六
合 計	二四六、八七一	六二〇	二・五一	二・〇〇
患者恢復期ニ際シ檢査ヲ依頼シ來レルモノ 刑務所ノ依頼ニ依リ檢査シタルモノ	一、二七三 八、二三二	一 一一	〇・七九 一・三四	〇・七〇

(イ) 百貨店ノ食堂従業員	二四、〇七七	五	〇・二一	〇・〇四
(ロ) 料理飲食店組合ニ料金を負擔セシメテ檢査シタルモノ	六、四六一	一	〇・一五	
他ノ檢査所(病院)ニ於テ發見シタルモノ	不詳	一一		
當廳管外ヨリ轉入シタルモノ		五		

備考 甲表ノ備考一及二參照

十四、腸「チフス」豫防注射

大正十三年腸「チフス」ノ蔓延甚シキニ稽ミテ豫防注射ノ獎勵ヲ開始シ、爾來東京市内ニハ主トシテ
東京市製造ノ「ワクチン」ヲ充テ、郡部ニハ當廳ニ於テ「ワクチン」ヲ製造シ之ヲ町村、衛生組合、町
會或ハ小學校、工場等ノ各種團體ニ供給シテ豫防注射ヲ實施セシメタルガ逐次一般民ノ理解スル所
トナリ、第一表ノ如ク昭和三年頃ヨリ年々人口ノ略三〇％位ニ普及スルニ至レリ、蓋シ近年腸「チ
フス」ノ流行ガ概ネ小康ノ狀ヲ維持セル一半ノ理由ハ本施設ノ效果ニアルコトヲ信ズルモノナリ。
然ルニ町會ノ年中行事トシテ施行シ來レル本豫防注射モ數年ニ亘ル本病流行ノ類勢狀態ニ馴レテ民
衆ハ漸次關心ヲ失ヒ、注射施行主體ノ幹部亦熱意ヲ缺ギ或ハ煩勞、疼痛ヲ厭ヒ、替フルニ内服「ワ
クチン」ヲ以テセントスル傾向モ亦アリテ今ヤ豫防施設ノ統制上特ニ考究熟慮ヲ要スル時ニ際會セ
リ。

元ヨリ豫防注射ハ之ニ絶對的信賴價值ヲ認メタルニアラズシテ、吾國ノ糞尿ヲ農肥ニ使用スル特殊

性ト衛生設備ヲ缺如スル都市ノ不具的膨脹及合理的豫防法ノ徹底困難ナル現狀ニ鑑ミ、先ヅ病毒媒介物ヲ對象トスル各種ノ豫防施設ヲ勵行スルト共ニ内ニハ各人個體ノ免疫力ヲ生成セシメ以テ本病豫防ノ目的ヲ達成セシメン爲ニ之ヲ採擇シタル次第ナリ。

然ルニ豫防注射ヲ強制令ニ依ラズシテ、助長行政下ニ任意施設トシテ實施セル現況ニアリテハ、經費、時間、或ハ疼痛等ノ經濟的肉體的ニ相應ノ犠牲ヲ要スル爲ニ陸海軍ノ如ク平常時定期的ニ施行スルモノ少クシテ、其ノ多クハ流行季節ニ及ビテ計畫實施セラル、殊ニ常時ニ患者ノ發生ヲ見ザル地方ノ風習トシテハ、隣域ニ或ハ部落内ニ患者ヲ出シ相當蔓延ノ兆ヲ認メタル後急遽豫防注射ヲ實施スルヲ常トセリ。從テ被注射人ハ既ニ病毒ヲ受ケテ潜伏期ニ屬スルモノアリ、病毒ニ接セザルモ生活環境既ニ有毒地帯ニ惡化シタル後豫防注射ヲ受クル狀態ニアルヲ以テ、勢ヒ注射後短日ニシテ發病シ或ハ新ニ感染スルモノ、事例少カラザルナリ、爲ニ常人ニ於テハ無論、相當識者ニシテ猶且此ノ時季的及土地的ニ有毒境化シタル後注射ヲ行ハル、特殊事情ヲ斟酌スルコトナク、注射後間モ無ク罹病シタル若干ノ數字ヲ直視シテ徒ラニ其ノ效力ヲ懷疑シ、或ハ陰性期ノ學說ヲ援用シテ注射施行當時ハ却テ罹患率高シト即斷吹聴スル者アリテ、民衆其ノ適從ニ迷フ者アルコトハ甚ダ遺憾トスル所ナリ。

本年管内ニ發生シタル腸「チフス」患者三千二百七十三名ニ對シテ所轄警察署ニ於テ調査ヲ行ヒ、發

病前一ケ年内ニ豫防注射ヲ受ケタルコトアリトノ報告ヲ爲セルモノ百四十五名ヲ算セリ、内注射後十四日以内ニ發病シタル者二十三名ハ潜伏期中ノ注射施行者ト看做シテ之ヲ控除シ、豫防注射ヲ受ケタルニ拘ラズ一年以内ニ罹患シタリト認メタルモノハ百二十二名ニシテ内十四名ハ死亡轉歸ヲ爲セリ。

●第一表 腸「チフス」豫防注射施行人員表

年次	區分			人口ニ對スル注射人員百分比
	完	了	者	
昭和四年	一、一六三、九五六	三五六、一四三	一、五二〇、〇九九	二九・五八
同五年	一、二七一、五八四	三九四、四五九	一、六六六、〇四三	三一・三六
同六年	一、三一五、七一八	三二七、六五一	一、六四三、三六九	二九・八九
同七年	一、二九〇、九九四	三三六、九一八	一、六二七、九一二	二八・二九
同八年	一、三七一、五三一	三〇六、四四五	一、六七七、九七六	二八・四四

●第二表 腸「チフス」發病前一ケ年以内ニ豫防注射ヲ受ケタルコトアル者ノ調

昭和四年	豫防注射施行人員	發生者腸「チフス」總數	注射後罹患患者	同上中死亡者
	一、五二〇、〇九九	三、九四二	一二八	一四

昭 和 五 年	同 六 年	同 七 年	同 八 年
一、六六六、〇四三	一、六四三、三六九	一、六二七、九一二	一、六七七、九七六
三、八三九	四、一九四	三、二〇三	三、二七三
一一一	一三五	一〇二	一二二
二一	一九	一一	一四

備考 豫防注射施行後十四日以内ノ發病者ハ「注射後罹患者」欄ニ計上セズ

十五、赤痢内服「ワクチン」ノ應用

當應ニ於テハ赤痢疫痢豫防對策ノ一トシテ、去ル昭和五年ニ「豫防内服藥」ヲ創製シ、爾來流行濃密地域ニ於ケル罹患率ノ最モ高キ三歳乃至七歳ノ兒童ニ之ヲ服用セシメ相當良好ノ成績ヲ得タルニ鑑ミ、昭和七年ヨリ管下三歳乃至七歳ノ全兒童ニ洽ク之ヲ頒布スルコト、セリ、本年モ豫メ警察署ヲシテ各自治團體等ニ就テ實費ヲ辨償シテ本豫防藥ノ配給ヲ希望スル者ヲ調査セシメテ其ノ所要數ヲ決定シ、當應細菌検査所ニ於テ十二萬人分ノ菌培養ヲ行ヒ、外ニ四十餘萬人分ノ菌培養ヲ傳染病研究所及北里研究所ニ委託シ之ヲ一人分三個ノ錠劑ニ製劑シ、管下一齊ニ配給服用セシメタリ。之ガ實施成績ヲ概述スレバ左ノ如シ。

1. 配給方法

先ヅ既定經費ヲ以テ製劑シタル十二萬人分ヲ無償ヲ以テ特殊地域ニ配給シ、其ノ他ハ前年ノ通一

人分金十錢ノ實費ヲ徴シテ交付スル方法ニ依レリ。而シテ配布方法トシテハ本年ハ統制力アル町會衛生組合等ニハ其ノ團體ニ委任シ、然ラザル小部分ノミニ前年ノ如ク、兒童ノ保護者ヲ最寄小學校ニ集メ防疫職員ヨリ服用ニ關スル注意ヲ口述シタル後町會役員ヨリ豫防藥ヲ手交スル方法ニ依リ、五月二十五日開始六月二十五日全部ノ頒布ヲ了シタリ其ノ人員五十八萬九千四百十一人ヲ算シ、管下三歳乃至七歳總兒童數ノ約九割ニ及ベリ。

2. 效果ニ關スル考察

(イ) 實施對象ニ就テ

本年内服「ワクチン」應用者ノ普及率ハ前述ノ如ク、當時ノ推計目標兒童數ノ九割ニ及ベリ、然ルニ管下ノ居住民ハ日ニ月ニ轉出轉入ノ遽シキ動搖裡ニ於テ著明ナル人口増加ノ現象アリテ服用後年末迄ニ管外ヘ轉出シタル者並死去及交付ヲ受ケタルニ拘ラズ服用セザリシ者等ヲ差引クトキハ、服用者ハ漸次減少シ結局年末現在數トシテ五十四萬六千五百人ノ推計數ヲ得タリ。

一方豫防藥頒布後年末迄ノ間ニ於テ發生シタル患者ニ對シ、警察官吏又ハ防疫職員實查ノ結果豫防藥服用者ニシテ罹患シタリト認メタルモノハ第一表ノ如ク、三千九百十二名（服用後十四日以内ニ發病シタルモノハ免疫效力發現前ノ服用者ト見テ之ヲ除ク）ヲ算シタリ。

(ロ) 患者發生率ヨリ觀テ

前掲ノ年末現在數ヲ以テ服用人員ニ對スル服用後罹患患者ノ萬對比ヲ概算スレバ七一・五七ニ相當セリ。又年末現在ニ於ケル同年齡級ノ服用セザリシ人員ヲ求メ其ノ萬對患者發生率ヲ概算セバ二三〇・一四ニシテ兩者ハ概ネ一對三ノ比例ヲ示セリ。

尙此ノ發生患者ヲ年齡別ニ觀察スルニ、何レノ年齡ニ於テモ服用者ト、非服用者トノ發生率較差ハ略相類似シ、而モ前年ノ成績トモ亦近似シ居レリ。

以上ノ統計示數ヲ以テセバ、本年ノ豫防藥服用者ハ、服用セザリシ同年齡級ニ比シ罹患率ヲ三分ノ一二低下セルヤニ思料セラル。但シ實際上本統計ニハ相互ニ複雑微妙ナル諸種ノ因子ヲ交錯セル關係上此ノ數字ヲ以テ直ニ標準效價ナリト即斷スルコトハ妥當ナラズ。

●第一表 人口割合ヨリ觀タル豫防藥服用者ト非服用者トノ罹病比較

年	次	目標兒童人口		罹患患者數(赤痢、疫痢)		人口萬對發生率		對比
		服用者	非服用者	服用者	非服用者	服用者	非服用者	
昭和八年(自國人口ノ九割配付)		五、六、五三	一三、三三七	三、九三三 六、七五〇	二、八六六	七・五七	二二〇・二四	1. 3.2
前 昭和七年(右八割配付)		四、九、八七三	一七、七六八	一、九六六 四、三二七	二、三三三	四四・二五	一三四・二五	1. 3.0
同 六年(右三割強配付)		一、九、九〇四	四〇、四九九	五、五五五	四、五五三	四四・六三	一〇五・七六	1. 2.4
年 同 五年(一部分配付)		一、一、五五三	三三、七〇三	四、二二二	二、〇七	三五・四九	八七・三三	1. 2.5

備考 本調査ハ豫防藥配付後、二週間以上經過シ發病シタル(自三歲至七歲)モノヲ集計セルモノナリ

(ハ) 全發生患者數ノ動向ヨリ觀テ

昨年及本年ノ如ク目標年齡者ノ絶對多數ニ豫防藥ヲ配給シ、前記ノ如キ相當ノ效果ヲ擧ゲ得タルニ於テハ先ヅ該當年齡級ノ患者數ヲ抑制シ、從來ノ流行情性ヲ或一程度ニ阻止シタルベク從テ總患者統計上ニ於テモ無論其ノ證明ヲ得ラルベシトハ一應考ヘラル、所ナリ。

然ルニ昭和八年全年ノ發生患者數ハ前章ニ述ベタル如ク、氣象的影響ヲ受ケテ著シク其ノ數ヲ増加シ、赤痢ノ病名ヲ附シタルモノ六千十名、同疑似症(警視廳令ニ依リ豫防法ヲ適用ス)二千二十一名、疫痢七千七十三名、合計實ニ一萬五千四百四名ノ多數ニ上リテ前年數ヲ遙ニ凌駕セリ、而シテ本施設ノ目標タリシ三歲乃至七歲ノ罹患患者ノ動向如何ヲ見ルニ是亦一般趨勢ニ順應シテ患者數ノ増加ヲ見タルモ、平年ニ於テハ三歲乃至七歲ノ罹患患者ガ總患者ノ六五%前後ナルニ比シ本年ハ六三%弱ニ低下シ殊ニ七月以後三四ヶ月ノ間ノ發生比較的少キ現象ヲ呈セリ、蓋シ輕微ニ過グル感ナシトセザルモ以テ本施設ノ效果ノ一面ヲ表現セルモノナラン。

由來助長行政上ノ實際現象ニハ、科學的數理的解説ヲ下シ得ザル玄妙ナル反動的結果ヲ齎スコト少シトセズ、譬ヘバ本年二月世田谷區ニ痘瘡患者ヲ發生シタルコトガ新聞記事ニ掲載サル、ヤ、各方面ヨリ水痘稀ニハ猩紅熱、微毒疹ノ如キモノヲモ痘瘡ト誤認シ又ハ其ノ疑アリトシテ

陸續届出ラレ或ハ昨年夏管下ニ「コレラ」ノ發生ヲ見タルトキノ如キ其ノ疑似届多數續出シ、爲ニ之ガ檢診ニ當ル防疫醫ハ甚シク多忙ヲ極メタル事實アリ。又豫防宣傳其ノ他ニ何等刺戟ヲ加ヘタルコト無キ或ル種ノ法定傳染病ニ對シテ刷新的ニ取締ヲ嚴シシ、檢病戸口査察ヲ勵行スルトキハ當分ノ間反射的ニ届出患者數ヲ激増スルコトハ當事者ノ毎常經驗セル所ナリ、惟フニ昨年及本年ノ如ク夏季ノ候管下一圓ニ赤痢疫痢豫防藥ヲ頒布シ、加フルニ豫防知識ノ啓發講演ヲ行ヒタルコトハ結局大衆ノ之ニ對スル關心ヲ昂メ延テ開業醫家ヲ刺戟スル處甚大ナルモノアルベク、亦此社會不況時代ニ於テハ病人ヲ出シタル場合ニハ輕額ナル食費藥價ノ實費ヲ以テ内容外觀共ニ優秀ナル公立病院ニ治療ヲ託サントスル心理的趨向モ顯著ニシテ彼之相俟テ著シク届出ヲ促進セラレタル傾向瀝然タリ。

蓋シ本病ノ如キ症狀急激ニシテ死亡率高キ傳染病及其ノ疑ヲ生ジタル場合、細菌検査操作或ハ臨床經過觀察ニ時ヲ徒消シテ愛兒ノ豫後ニ無用ノ心配ヲ重ヌルヨリモ、即決即療ヲ熱望シテ信賴ニ足ル病院ニ之ヲ託サントスルハ人心當然ノ歸趨ニシテ、本施設ノ結果ニ此等衝動性ニ所産スル患者數ヲ相當多分ニ包含スルコトハ勢ノ然ラシムル所ニシテ又本豫防藥ノ効果ヲ明瞭ニ量定シ得ザル一因タルベシ。

●第二表 豫防藥配付以後ノ赤痢患者發生表

		服用者		非服用者			
		服用人員(推計)	患者數	人口萬對發生率	人員(推計)	患者數	人口萬對發生率
三	歲	一一七、三五一	九六三	八二・一	二六、四七六	七三七	二七八・四
四	歲	一一四、四六四	一、一六二	一〇一・四	二五、八四七	七九九	三〇九・一
五	歲	一〇九、五三五	八六一	七八・六	二四、七一三	五五五	二二四・六
六	歲	一〇三、七九六	五九五	五七・三	二三、四一七	四五五	一九四・三
七	歲	一〇一、三三七	三三一	三二・七	二二、八六四	二九二	一二七・七
計		五四六、五八三	三、九一二	七一・六	一二三、三一七	二、八三八	二三〇・一

●第三表 赤痢總患者百中三歲乃至七歲ノ毎月發生率

	昭和八年		昭和七年		昭和六年	
	自三歲至七歲	自三歲至七歲	自三歲至七歲	自三歲至七歲	自三歲至七歲	自三歲至七歲
一 月	二二三	一六〇	二四七	一六〇	一九八	一三七
二 月	二六七	一六	二一〇	三六八	一八〇	一三六
三 月	三七六	二七	一七四	三三三	二六八	一四七
四 月	四二二	二八	一五八	三七六	四〇七	一六七
五 月	六六六	三三	三八五	七三九	五〇三	二二二
計	一、〇〇〇	六八・三	二、四七六	一、〇六九	二、八三八	一、二七三

計	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月
九、四八八	三、五〇〇	五、二	九、二	一、三〇二	一、九〇二	一、四八八	一、〇三二
五、六〇六	二、六五	三、六五	七、五	八、三	一、〇〇〇	六、五	四、七
一五、一〇四	六、五	九、四	一、六九六	二、一八三	二、九二	二、一〇三	一、四九六
六、三八八	五、九二	五、三〇	五、六六	五、六〇	三、五	六、七四	七、元
七、七八	二、六四	三、九	七、三	一、〇三	一、九三	一、二〇	九、元
三、八六	一、九二	二、七	四、三	六、八	五、六	三、三	三、二
二、五三	四、六	六、九	一、七四	一、七二	一、七八	一、九三	一、二九〇
六、六三	五、八九	五、一九	五、八〇	六、二六	六、九	七、八七	七、〇三
七、二三	三、〇八	三、六四	六、四八	九、五	一、三九	一、二四	七、〇
三、七四	二、〇三	二、七	三、六	六、三	七、二	五、七	二、七
一〇、九四七	五、二	五、八二	一、〇〇四	一、五七	二、二二	一、七六	一、〇三
六、八九	六、〇二七	六、三六	六、四五四	六、二二三	六、三七	六、九三	七、三二

第八節 「デフテリア」及猩紅熱ノ豫防

一、豫防知識ノ普及啓發

民衆ノ豫防警戒心喚起ノ爲、流行季節ニ本病豫防ヲ目的トスル講演會ヲ開催シ、消化器系傳染病豫防ノ講演會、講習會ニモ之ヲ併セテ講述シ居レリ、又昨年製作シタル宣傳映畫ヲ上映シ前年刊行ノ「デフテリア」豫防「パンフレット」ニ改訂ヲ加ヘ一萬部印刷シテ配布スル等、極力民衆ノ豫防知識教養ニ努メタリ。

又患者發生ノ際、他ニ小兒ヲ有スル患家ニ對シテハ消毒立會等ノ際防疫職員ヨリ家人ニ豫防方法ヲ懇示シテ二次的感染ヲ警戒セシメ、別ニ幼稚園及小學校ノ兒童間ノ傳染防止ニ就テ校長園長ト連絡シ夫々對策ヲ圖リツ、アリ。

●印刷物

種	類	名	稱	刊行部數	摘	要
小冊子	「デフテリア」の豫防	一萬部	町會、衛生組合等ニ於テ増刷配付シタルモノ相當多數アリ。			

●所藏映畫

目的		題名	巻	尺	摘	要
「デフテリア」の豫防		兄 妹	四巻	一、一七〇米	昭和七年製作	

二、保菌者検索

本年發生シタル「デフテリア」患者ノ家族同居人等ニ對シテ、保菌者検索ヲ行ヒタル人員二百七十三人ニ及ビ、此ノ内十九名ノ菌保有者ヲ發見シタリ。又別ニ病後排菌者トシテ取締ヲ爲シタルモノ五十名アリ、是等保菌者ハ普通一ヶ月以内ニ菌消失シ居レリ。

三、「チフテリア」豫防注射

「シツクテスト」ヲ以テ「デフテリア」豫防注射ノ指針ト爲シ、「アナトキシシン」ガ活動免疫ノ生成ニ偉效アリトスルコトハ内外豫防醫學界ノ漸ク認ムル處トナリ將ニ「チフテリア」防疫史ノ劃期時代ニ入リタル感アリテ、本邦各地ヨリモ數年來競ツテ之ヲ應用セラレ既ニ幾多ノ報告文献ヲ見ルニ至レリ、其ノ發表ヲ通觀スルニ大體ニ於テ小兒中ニハ六、七十%ノシツク陽性者ヲ有シ、其ノ陽性者ニ傳研製又ハ北研製ノ「アナトキシシン」ヲ用ヒ各指定スル處ノ用法ニ據リテ略八、九十%位迄ハ陰性ヘ轉向セシメ得ルヤニ省察セラル、ナリ。

吾東京ニ於テハ近年「デフテリア」多發ノ狀勢ニ鑑ミ昭和八年警視廳衛生部並東京市保健局ニ豫防

注射班ヲ編成シテ專ラ七歳以下ノ小兒ヲ對象トスル「アナトキシシン」注射ヲ行ヒ、亦此他衛生組合、町會等ニ於テ施行シタルモノモ相當アリテ年末迄ニ於ケル注射人員ハ左表ノ如ク三回注射完了者一

九七、三〇五人ヲ算セルガ尙今後モ繼續施行ノ豫定ナリ。
本豫防注射ノ實際效果ヲ量定スルニハ猶今後相當年月ノ經驗ヲ要スル處ナルモ、本施設ハ未ダ濫觴期ニ在ル爲ニ民衆ハ勿論開業醫家ノ間ニモ適從ニ迷ヘル者アルヲ以テ茲ニ昭和八年實施ヨリ本年鑑編輯迄ニ於ケル成績ヲ有リノ儘ニ集計シテ大要觀察ヲ下シ以テ防疫行政ノ參考ニ資セントス。

●第一表 昭和八年中ノ「デフテリア」豫防注射施行人員

施行主體別	注 射 人 員		
	第 一 回	第 二 回	第 三 回
警視廳注射班	五九、一二五	五七、〇八五	五五、二〇五
東京市注射班	一一七、〇二二	一〇一、四七一	八九、七五五
町村、町會、衛生組合等	五四、二七二	五四、〇四五	五二、三四五
合 計	二三〇、四一九	二一二、六〇一	一九七、三〇五

備考 警視廳及東京市注射班ノ施行シタルモノハ專ラ數ヘ年二歳(滿一歳未滿ハ除ク)以上七歳ノ小兒ヲ目標トセルモ、町村、町會、衛生組合等ノ施行セルモノニハ小學校兒童ヲ含メルモノアリ

1. 昭和八年中ニ生ジタル豫防注射後ノ罹患者ニ就テ

本施設ハ罹患者ノ最モ高キ満一歳以上、數ヘ年七歳以下ノ小兒ヲ目標トシテ實施シタルモノナルガ、警視廳管下ニ於ケル其該當者ハ八十萬人ヲ超エ、昭和八年ノ豫防注射施行人員ハ約其ノ四分ノ一二相當セリ、右ハ累年發生率ノ高キ地方ヲ選定シ年中順次ニ施行セルモノニシテ、此ノ外ニ昭和七年中ニ約一萬五千人ノ注射人員アリ、而シテ此等注射人員中ヨリ昭和八年中ニ罹患シ「デフテリア」ト診定届出ラレタルモノハ次表ノ如ク百十四名ニ達シ死亡十二名ヲ算セルガ、此ノ中最終注射日ヨリ二ヶ月以後ニ於テ發病セル者五十五名、死亡轉歸者六名アリ、蓋シ「シツクテスト」ヲ以テ案ジタル場合豫防注射後ノ免疫生成ハ概ネ二ヶ月後ニ高潮ニ達スル事實ヨリ鑑ミ本施設ノ實際應用上ニ於テモ猶效驗ノ及ビ得ザルモノ相當數アルコトヲ實證セルモノト考ヘラル、ナリ。右注射後罹患者ノ死亡率ハ一〇・五二%ニシテ平均死亡率率一六・四五%ニ比シ著シク低率ナリ。尙右數中警視廳注射班ノ行ヒタルモノ、ミニ就テ性及年齡別考察ヲ第三表ニ索ムルニ罹患者ノ實數少ク五歳及二歳ニ例外アルモ平素罹患者ノ高キ年齡級ニ依然トシテ發生多キ感アリ。

●第二表 昭和八年ノ「デフテリア」患者ニシテ豫防注射ヲ受ケタルコトアルモノ、調

區分	第一回注射ニテ中止シタルモノ		第二回注射ヲ以テ中止シタルモノ		三回完了者	
	患者數	内死亡	患者數	内死亡	患者數	内死亡
一週以内	五		一		四	一〇
二週以内	二		三		一	一九
一ヶ月以内			四			八
二ヶ月以内	一		二		二	二二
三ヶ月以内	一		三		二	二〇
三ヶ月以上	一		三		四	三五
合計	九		一三	三	九一	一一四

●第三表 昭和八年警視廳注射班施行ノ豫防注射人員ト注射後罹患者ノ性及年齡別

年 齡	豫防注射施行人員			注 射 後 罹 患 者		
	男	女	計	男	女	計
二 歳	三、六六三	三、三八〇	七、〇四三	一		二
三 歳	五、三六六	五、四九三	一〇、八五九	五	三	八
四 歳	五、五四五	五、一七三	一〇、七一八	六	五	一一
				注射人員對萬分比		
				二・八四		
				七・三七		
				一〇・二六		

合 計	五 歲	六 歲	七 歲
三〇、〇五五	五、一八七	五、二〇八	五、〇八六
二九、〇七〇	四、九四六	五、〇四一	五、〇三七
五九、一二五	一〇、一三三	一〇、二四九	一〇、一二三
二二	二	三	五
二一	四	六	二
四三	六	九	七
七・二八	五・九二	八・七八	六・九一

備考 本表ニハ警視廳注射班ノ施行シタルモノノミヲ調査計上セルヲ以テ前表ノ數ト符合セズ。

2. 警視廳注射班ノ開始當時實施シタル六地域ノ爾後ニ於ケル患者發生消長

前項ハ昭和八年中月毎ニ順次注射ヲ受ケ増加スル注射人員中ヨリ生ジタル罹患實數ヲ掲ゲシニ過ギズ、果シテ豫防注射ノ相當普及セシ地域ニ於テハ爾後患者ノ發生ニ如何ナル消長アルヤニ就キ八年四月ヨリ同八月ノ間警視廳注射班ノ着手當初ニ實施シタル六地域ヲ調査スルニ、次表ノ如ク六本木及世田谷ノ實施地域ハ越年二月ニ及ブモ殆ド目標兒童中罹患患者無ク又六地區合計ニ於テ見ルトキハ豫防注射開始前ニハ數ヘ年二歳乃至七歳ノ小兒ヨリ九十六名ノ患者ヲ生ゼルニ對比シ當歳及八歳以上ノ患者數ハ七十九名ナリ、然ルニ注射終了ヨリ二ヶ月以後昭和九年二月迄ノ間ニ於テハ該當年齡級ヨリ四十八名ノ患者アルニ拘ハラズ、他ノ年齡級ニ於テハ之ヲ超過シテ五十四名ノ患者ヲ出シ前者ノ年齡級ニ或ル程度ノ抑壓力ノ加ハリ居ルコトヲ偲バシムルモノアリ、更ニ該當年齡級罹患患者四十八名ニ就テ調査スルニ豫防注射ヲ受ケタルモノハ十七名ニ過ギズシテ殘三十

一名ハ非注射者ナリキ。

由來都市ノ居住人ハ常ニ代謝甚シク大衆ハ流轉狀態ニ在リテ此種人口對比ヲ以テ論究スル場合正確ナル數字ヲ把握スルコト極メテ困難ナルト共ニ行政力ニ依ル注意喚起思想啓發等民衆ノ關心ヲ向上セシムルコトハ必然的ニ或期間屆出ヲ促進スル反動現象ヲ結果スルモノナリ。

次表六地域ノ該當兒童ハ八年末ニ於テハ受注射者ハ恐ラク二萬千五百名位ニ減少セルモノト推計セラレ、之ニ反シテ同年齡級ノ非注射者ハ當初ノ約九百名ニ移住及注射施行以後滿一歳ニ及ブモノヲ合算シ五千名ニ達スル推計ヲ得ラル、ナリ。

此ノ兩者ノ人員ヲ假ニ母體トシ、罹患患者四十八名ヲ注射ノ有無別ニ推算スレバ、受注射者ハ一萬人ニ付七・九一ナルモ非注射者ハ一萬人ニ付六二・〇〇ニシテ凡ソ一對八ノ比ヲ示セリ。

●第四表 昭和八年「デフテリア」豫防注射施行地域ノ患者發生消長

昭和八年	月別患者數	署名	高輪	六本木	目黒	世田谷	大井	代々木	合 計	目患ニ標者對
一	七	年	概ネ全管内	外六ヶ町	清水町	上馬一丁目	舊第十區	笹塚町		標者對
五	二	年	(九・三三%)	(九・五〇%)	(九・六六%)	(九・四八%)	(九・二〇%)	(九・三三%)		兒ノス
三	一	年	(九・三三%)	(九・五〇%)	(九・六六%)	(九・四八%)	(九・二〇%)	(九・三三%)		一患割
一〇	五	年	(九・三三%)	(九・五〇%)	(九・六六%)	(九・四八%)	(九・二〇%)	(九・三三%)		般者合
二	四	年	(九・三三%)	(九・五〇%)	(九・六六%)	(九・四八%)	(九・二〇%)	(九・三三%)		
〇	〇	年	(九・三三%)	(九・五〇%)	(九・六六%)	(九・四八%)	(九・二〇%)	(九・三三%)		
五	四	年	(九・三三%)	(九・五〇%)	(九・六六%)	(九・四八%)	(九・二〇%)	(九・三三%)		
三	六	年	(九・三三%)	(九・五〇%)	(九・六六%)	(九・四八%)	(九・二〇%)	(九・三三%)		
一九	三	年	(九・三三%)	(九・五〇%)	(九・六六%)	(九・四八%)	(九・二〇%)	(九・三三%)		
九	三	年	(九・三三%)	(九・五〇%)	(九・六六%)	(九・四八%)	(九・二〇%)	(九・三三%)		

成生疫免							開期行施射注				
一昭和九年	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月
二	〇	三	一	二	〇	〇	五	四	三	三	四
5	4	2	2	3	2	1	3	6	3	2	2
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	二	二
2	1	0	0	0	0	0	0	2	2	2	1
三	一	一	六	一	〇	一	七	二	八	二	四
2	1	4	5	2	5	7	4	1	2	6	5
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三	一	三
0	2	0	0	0	0	0	0	2	1	2	4
一	〇	一	〇	〇	〇	一	〇	〇	一	一	一
0	0	1	0	0	0	1	1	2	1	1	1
八	三	一	一	一	六	二	六	四	三	二	二
1	3	2	4	4	3	3	3	6	6	7	2
一四	四	六	八	四	六	四	一八	二〇	一八	二九	一六
10	11	9	11	9	10	12	11	19	15	20	15
(名七十三 名一十三)			四				六				
54			48				79				
六・一六	六・五五	五・七三	五・九〇	五・三三	五・七五	五・五三	五・六〇	六・八六	六・七二	七・九六	七・〇八

二	月
三	三
43	3
ハ	一
13	2
充	五
53	4
九	〇
15	0
七	一
8	0
五	四
49	1
	一四
	10
一七	
181	
	六五・一四

備考 目標年齢トハ豫防注射當時ノ實施對象トシタル二歳乃至七歳ノモノヲ云フ。

3. 目標兒童數ニ對シテ四十%以上ニ注射ヲ普及シタル地域ノ昭和九年一、二月ニ於ケル患者發生消長

次ニ警視廳、東京市其ノ他ノ主體ニ於テ施行シタル注射人員ヲ合算シ其ノ第一回注射人員ガ警察管區別ニ於ケル八年末現在推計ノ目標兒童數ニ對シ四十%以上ニ普及セル左表十八署ノ昭和九年一月及二月ノ二ヶ月間ニ於ケル患者發生消長ヲ見ルニ、豫防注射施行者中ヨリ十九名、注射ヲ行ハザリシ同年齡級ニ於テ百十名ノ患者ヲ出シ結局目標兒童ヨリ百二十九名ノ患者ヲ算シ其ノ他ノ年齡ヨリ二百十一名ヲ出セルガ、普及率八十%以上ノ九署(内一署ハ全然患者ナシ)ノミニ於テハ注射後罹患者六名、同年齡級ノ注射セザルモノ四十一名、即チ目標兒童中ヨリ計四十七名ノ患者ヲ算シ其ノ他ノ年齡者ヨリ四十名ノ患者ヲ發生シ居レリ。

右實數ヲ第六表ニ據リ人口萬對比ヲ以テ考察スルニ、注射ヲ受ケタルモノハ一・六六ニシテ同地區ノ非注射者ノ一四・八三ニ比シ約九分ノ一ニ止マリ、十八署以外ノ一般地區(累年ノ患者發生率ハ十八區ニ比シテ低シ)同年齡級ノ八・九二ニ比スレバ約六分ノ一ニ過ギザルナリ。

●第五表 前年ニ豫防注射ヲ對象兒童ノ四〇%以上ニ普及セシメタル警察管
區ノ昭和九年一月及二月ニ於ケル「ヂフテリア」患者發生表

警察署別	豫防注射 施行時期	在住兒童數 ニ對スル 一回注射普及率	患者發生數			
			該管 年 齡 者	非該管 年 齡 者	合計	合計
丸ノ内	昭和八年 自九月三十日 至十月十四日	九四%	注射ヲ受 ケタル者	非注射者	計	年 齡 者
高輪	自四月十一日 至五月六日	八七%	五	五	一〇	八
六本木	自五月八日 至八月十五日	七七%	二	二	四	六
象潟	自十一月二十六日 至十一月十八日	八三%	三	三	六	八
日本堤	自九月二十五日 至十一月五日	八二%	一	一	二	六
太平	自八月三十一日 至八月三十日	六一%	九	九	一八	一七
厩橋	自八月十四日 至九月十日	八一%	四	五	九	九
大井	自六月二十九日 至十月四日	五一%	五	五	一〇	八

大崎	自十一月二十五日 至十一月十二日	四〇%	二	五	七	六	一三
尾久	自十二月二十七日 至十二月二十一日	八八%	八	八	一六	五	一三
南千住	自九月二十二日 至八月二十二日	七四%	六	七	一三	二	九
三河島	自九月二十五日 至十一月八日	九〇%	二	一	三	五	一七
日暮里	自十一月二十四日 至十一月二十四日	七一%	九	九	一八	四	一三
千住	自八月十四日 至八月三十一日	五七%	六	一	七	五	三〇
寺島	自三月二十日 至八月十八日	八五%	一	五	六	三	九
吾嬬	自四月二十五日 至七月二十二日	六七%	二	一	三	二	一四
八王子市	自九月二十二日 至九月二十二日	八〇%	三	四	七	五	一二
青梅	自十一月二十四日 至十二月二十四日	六八%	四	二	六	八	一四
計	總注射人員ハ一三四、三三四人ナルモ此内八歳以上ヲ除キ二乃至七歳ノモノハ一二二、一〇〇人ナリ		一九	一一〇	一二九	八二	二一一
右ノ内普及率八〇%以上ノモノヲ再掲			六	四一	四七	四〇	八七

●第六表 前表患者ノ人口ニ對スル發生割合

右クシ域内管轄(但シ嶺南ヲ除ク)		十 八 警 察 管 區					區	
其 他 ノ 年 齡 人 口	目 標 兒 童 人 口	其 他 ノ 年 齡 人 口	注 射 施 行 目 標 兒 童				分	
			計	施行當時滿一歲未満ノモノ並人口代謝ニ依ル増加ヲ見積修正ス	施行當時豫診中止或ハ不參集ノ爲注射ヲ受ケザリシ人員	施行後年末迄ニ轉出其他ニ依ル減員ヲ見積修正ス		昭和八年中ノ豫防注射施行人員
三、九九四、三〇〇	六二六、五〇〇	一、〇五一、一〇〇	一八八、四〇〇	七四、二〇〇	六二、八〇〇	一一四、二〇〇	一二二、一〇〇	入口及注射人員(昭和八年末)
四二八	五五九	八二	一二九	一一〇		一九		昭和九年一月及二月ニ發生シタル患者數
一・〇七	八・九二	〇・七八	平均 六・八五	一四・八三		一・六六		人口一萬對發生率

4. 總括考察

イ、各統計ヲ綜合考察スルニ昭和八年ニ施行シタル「アナトキシン」ノ注射ハ之ヲ受ケタルモノ、

中ヨリ若干ノ罹患患者ヲ出セルモ、之ヲ行ハザリシモノニ對比スレバ注射後免疫生成前ニ罹患シタルモノヲ加算評價シテ猶概ネ罹患率ヲ六分ノ一乃至九分ノ一程度ニ抑壓セリト推測セラレ、各地ヨリ發表セラレツ、アル「シツクテスト」陽性者ニ對シテ注射ヲ施行シ「リテスト」ヲ行ヒタル場合ノ陰性轉向成績ニ大體接近セルコトヲ思ハシムルモノアリ。

ロ、本調査ニ於ケル豫防注射施行後ノ罹患患者ハ未ダ實數少ク之ヲ統計的ニ推斷シ得ザルモ

(一) 平素罹患率ノ高キ年齢程注射ノ效果劣ルカノ感アルコトハ「シツクテスト」ノ年齢別成績ト符合セル如ク思ハシム。

(二) 夏季ニ注射セルモノハ冬春季ニ施行シタルモノニ比シ成績稍劣ルニアラザルカラ思ハシムル點アリ、季節ニ依リテ抗體ノ產生ニ多少ノ差違ヲ生ズルヤ否ヤハ興味アル點ニシテ今後「アナトキシン」注射或ハ「シツクテスト」ニ依リテ諸家ノ研究ヲ望ム次第ナリ。

ハ、「アナトキシン」注射ハ幼弱者ニ行フモ禁忌スベキ特異反應殆ド無シト雖モ注射器具或ハ空中飛塵等ヲ介シテ化膿菌ノ如キ微菌ノ微量ガ萬一注射液中ニ混入シタル場合ニ暫時生存スルモノ、如ク、一面本液ハ人體ニ吸收緩慢ニシテ之ニ混入シタル微菌ハ増殖シテ一週間前後頃ニ至リ深部ニ化膿點ヲ作ル事例時ニアリ、爲ニ多數人ヲ集合シテ混雜裡ニ注射ヲ施行スル場合ノ如キ器具類及皮膚等ノ消毒ニ特段ノ注意ヲ拂フ必要アルコトハ本豫防方法普及上ニ於ケル一ツノ